



極低出生体重児における未熟児無呼吸発作の検討 第三報:重症無呼吸発作の長期予後

藤岡, 一路 ; 村瀬, 真紀 ; 伊東, 利幸 ; 湊川, 誠 ; 中岡, 総子 ; 山内, 淳 ; 豊嶋, 大作 ; 西山, 敦史 ; 住永, 亮 ; 石田, 明人

(Citation)

日本周産期・新生児医学会雑誌, 44(2):508-508

(Issue Date)

2008-06-20

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

right:日本周産期・新生児医学会

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001760>



O-300 極低出生体重児における未熟児無呼吸発作の検討 第三報：重症無呼吸発作の長期予後

加古川市民病院小児科

○藤岡一路, 村瀬真紀, 伊東利幸, 湊川 誠, 中岡総子,
山内 淳, 豊嶋大作, 西山敦史, 住永 亮, 石田明人

【背景】これまでの検討で我々は極低出生体重児（以下VLBW）の未熟児無呼吸発作について、重症無呼吸は主に在胎30週未満の児において認められ、修正31週を境に軽快すること（第52回未熟児新生児学会）、重症無呼吸発作群と対照群の患者背景に有意差がないことを報告した（第111回日本小児科学会）。

【目的】VLBWにおける未熟児無呼吸発作の長期予後に対する影響を検討すること。

【対象と方法】1996年1月~2000年12月に当院NICUに入院したVLBW256名中、在胎26~29週は106名であり、ここからIUGR、奇形/染色体異常、二次性無呼吸発作、修正3歳までのフォロー不能例を除いた65名を対象とした。対象65名を、修正31週時点でのドキサプラム使用の有無により、重症無呼吸発作群（A群：23名、在胎 28.1 ± 1.1 週、BW 1063 ± 170 g、AS $5.7/7.7$ ）と対照群（B群：42名、在胎 28.2 ± 1.3 週、BW 1111 ± 223 g、AS $5.9/7.9$ ）に分け、長期予後につき比較した。長期予後の検討は、修正3歳時の新版K式発達検査、および修正6歳時のWechsler Preschool and Primary Scale of Intelligence（以下WPPSI知能診断検査）によった。

【結果】1) A群、B群の在胎週数、出生体重、Apgar Scoreには有意差を認めなかった。修正1歳時、1歳6ヶ月時、3歳時、6歳時の身長、体重、頭囲の発育に関しては、修正3歳時にA群の体重が高値であった（ 12.7 ± 1.3 kg : 11.9 ± 1.4 kg）（ $p < 0.05$ ）以外、両群間で有意差を認めなかった。2) 修正3歳時の新版K式発達検査を施行できたのは、A群22名：B群38名であり、姿勢・運動（ 88.5 ± 9.3 : 83.8 ± 17.0 ）、認知・適応（ 83.8 ± 8.0 : 85.3 ± 12.0 ）、言語・社会（ 85.1 ± 10.5 : 82.1 ± 12.7 ）および全領域（ 85.0 ± 7.6 : 83.6 ± 10.7 ）の各項目において両群間で有意差を認めなかった。3) 重度発達遅滞により3歳時の発達検査不能例は、A群1例（4%）、B群4例（10%）と両群間で有意差を認めなかった。4) 脳性麻痺は、A群4例（17%）、B群7例（17%）と両群間で有意差を認めなかった。5) 修正6歳時のWPPSI知能診断検査を施行できたのは、A群14名：B群28名であり、言語性（ 81.7 ± 16.3 : 81.4 ± 19.1 ）、動作性（ 90.2 ± 12.7 : 90.6 ± 20.8 ）、および全領域（ 82.7 ± 15.1 : 84.2 ± 16.0 ）の各項目において両群間で有意差を認めなかった。

【結論】過去の報告で、早産児の無呼吸発作は長期発達に悪影響を及ぼすとされたが、今回の検討では、少なくとも在胎26週以上のVLBWにおいては、無呼吸発作の重症度は発育・発達に有意な影響を及ぼしていなかった。